

文化人（俳人）の書状を読む

はじめに

【俳諧／俳句】

- ・俳諧は、中世の「連歌」から派生。滑稽、諧謔や機知を意味する文芸で、「俳諧（之）連歌」の略。原則は複数人によって、長句（五七五）と短句（七七）を連ねていく形式（韻）か、芭蕉時代から主流となる、三十六句を連ねて一作品とする「歌仙」が一般的。そこから、「発句（ほっく）」（連歌の巻頭句）が独立して詠まれるようになり、「俳句」として成立した。
- ・埼玉県における俳諧の淵源として、河越城の太田資清（おおた すけきよ）（道真 1411－1488）が連歌師宗祇（そうぎ）（1421－1502）らを招いて興行した「河越千句」が挙げられる。宗祇の弟子宗長（そうちょう）（1448－1532）も県内各地で武将らと連歌会を催す。
- ・松尾芭蕉（1644－1694）『おくのほそ道』
ことし元禄二とせにや、奥羽長途の行脚只かりそめに思ひたちて…其日漸早加と云宿にたどり着にけり。※元禄2年は1689年。同行した曾良の日記にも「カスカへ」「栗橋ノ関所」が登場。
- ・埼玉県内でも俳諧は庶民の間に定着し、本庄の豪商戸谷光寿（とや みつとし）（双鳥（そうう） 1774－1849）、羽生・行田を中心に活動した鈴木秋瓜（すずき しゅうか）（？－1790）が興した多少庵系のほか、加舎白雄（かや しらお）（1738－1791）の一派春秋庵系ら、県内各地では多くの俳諧結社のもとで俳人達が活動した。

1 史料について

（1）小室家文書（総点数 7,622 点）

- ・比企郡番匠村（現ときがわ町）の小室家に伝来した資料群。小室家の先祖は、藤原氏の出自を持ち、竹内を名乗って当初は越前に住したが、正徳年中には越前を離れ、その際に姓を田代と改めている。享保2年（1717）に関東に下向し、当初は相模国に居住して医学を学び、高麗郡に移ってのちの享保7年に現在の番匠村に定住、在村医として活躍した。その資料群は、医学関係資料のみならず近世の名主文書のほか、俳諧を中心とした文化人との交流や好古家として収集した資料など多岐にわたっており、平成29年に歴史資料として7,622点が一括して埼玉県指定有形文化財に指定された。

（2）小室家歴代当主

①初代 田代元貞（元禄15～安永6 1702～1777）

諱名は方命。享保7年に番匠村に居住。

②二代 田代通仙（享保17～文化3 1732～1806）

幼名を波門、自在庵亀洞と号す。

③三代 小室元長（明和元～安政元 1764～1854）

足羽（そくう）・観牙・如達堂（によたつどう）・七器亭と号す。姓を田代から小室に改めた。甲斐国の医師鶴田斎宮に師事して産科を学び、文政年間に医学塾「如達堂」を開塾し、多くの名医を輩出した。

春秋庵三世の川村碩布（かわむら せきふ）（1751－1843）に師事した俳人として著名。

④四代 小室元貞（寛政元～安政5 1789～1858）

丹波篠山藩の侍医足立長雋（1775－1837）に師事し、蘭学に強い関心を寄せた。門人であった岡部均平（おかべ きんぺい）（1815－1895）・伊古田純道（いこだ じゅんどう）（1802－1886）は日本最初の帝王切開術を成功させた人物として歴史に名を遺している。

為一（いいつ）、物庵と号し、嘉永6年（1853）刊行の『俳諧海内人名録』に採録されるなど著名な俳人でもあった。春秋庵碩布の跡を継いだ久米逸淵（くめ いつえん）（1790－1861）の後援者としても活動し、逸淵による碩布の追善集ほか『年波集』の出版に関して助力を行った。

⑤五代 小室元長（文政5～明治18 1822～1885）

祖父元長に期待され、安藤文沢（あんどう ぶんたく）（1807－1872）のもとで医学を学び、忍藩の儒学者芳川波山（よしかわ はざん）（1794－1846）に学問を学んだ。晩年は甲山の根岸武香（1839－1902）らとともに郷土史研究に打ち込み、史料収集の他、多くの写本、著作を残している。

俳号として笠山（りゅうざん）・誠廬（せいりょ）を持ち、祖父足羽、父為一とともに俳壇で活躍した。※ゴシック体は、テキストに登場する人物。

（3）春秋庵と俳人久米逸淵

春秋庵は、芭蕉の門人岩田涼菟（いわたり りょうと）（1659－1717）の伊勢派に連なり、埼玉県下で大きな影響力があった佐久間柳居（さくまりゅうきよ）（1686－1748）の孫弟子加舎白雄（かや しらお）によって開かれた。白雄の門弟は四千人とも言われ、その高弟には常世田長翠（とこよだ ちようすい）（1750－1813）、倉田葛三（くらた かつさん）（1762－1818）、川村碩布らがおり、高弟とその門流が春秋庵の名を代々襲名して活動した。一門の句集として『春秋稿』がある。

久米逸淵は、児玉村（現本庄市）の人で寛政2年（1790）に生まれた。出自の地名、あるいは武蔵七党の児玉党の出自を祖に持つとして児玉氏を称した（自ら建てた墓碑銘には児玉逸淵と記す）。当初は可布（かふ）（可布庵）を号し、天保9年（1838）頃に逸淵と改号したことが残された史料から推察できる。このほか椿・瓢箪を愛玩したため椿老、瓢隠居とも号した。

加舎白雄が興した春秋庵系の俳人として活動し、若い頃から春秋庵四世川村碩布に師事した。のちに、師碩布から春秋庵を譲られた（ただ、すぐに返上している）。

宗匠として大社中を形成し、門人への添削料（朱料）、主催する月次句合会への出品料（入花）によって生計を立てることができた（業俳）。

活動の場は、長らく上野（こうぜけ）（現群馬県）を中心としたものであったが、天保9年（1838）に江戸に移り、神田紺屋町、木挽町などに住した後、安政3年（1856）67歳の折、本庄を隠棲の地に選んだ。同じ本庄宿で豪商であった戸谷双鳥とも交遊を結んでいる。最晩年には生地の子玉に戻り、文久元年（1861）に72歳で没した。

小林一茶（1763－1828）と親交があり、その句集『おらが春』の序文を書いたことが知られているほか、師碩布の三回忌に『追善集』、同十三回忌には『碩布発句集』を出版。自身の



『俳家百人一首』所収
可布庵逸淵像

俳人仲間の句集として、年刊撰集『としなみしふ』十篇を刊行した。

2 語句解説

- ・梅笠（ばいりゅう）…加舎梅笠（1805－1863）。川村碩布門下の俳人。逸淵、有墨（うぼく）の跡をついで春秋庵を継いだ。
- ・雀躍（じゃくやく）…小躍りして喜ぶこと。欣喜雀躍。
- ・春興（しゅんきょう）…新年のうちに開かれる俳諧の会にて詠まれた句（春興の句）を印刷したもの。春興帖とも。新年に入ってからでは間に合わないため、実際には旧年のうちから句を集めて摺られた。
- ・年波（としなみ）…逸淵の編集した年刊撰集『としなみしふ（年波集）』のこと。天保 14 年（1843）から嘉永 5 年（1852）の 10 年に渡って刊行された。

3 書状の年代推測

[過月十二日御認之書状梅笠より相届拜読二付返書] 小室家No.1038

- ・本文の「年波」は、句集「としなみしふ」のことで、天保 14 年に初編が刊行、以後 10 年間続刊されたことから、天保 14 年から嘉永 5 年までは絞ることができる。
- ・『としなみしふ』第七篇（嘉永 2 年・1849 刊行）の序文が五代小室元長（誠廬）によって書かれていることから、この前後位のものではなかろうか（第七篇には、誠廬も 1 句入集している）。
参考：同じ木の二度に是咲さくら哉 誠廬

○参考文献

内野勝裕『檀寮碩布と春秋庵をめぐる人々』（まつやま書房、1986 年）

『児玉町史史料調査報告第 13 集 久米逸淵小伝』（児玉町教育委員会、1990 年）

『小室家文書目録』埼玉県立文書館収蔵文書目録第 36 集（埼玉県立文書館、1997 年）

『近世埼玉の文人たち』（さいたま文学館、2002 年）

内野勝裕『埼玉俳諧人名辞典』（さきたま出版会、2005 年）

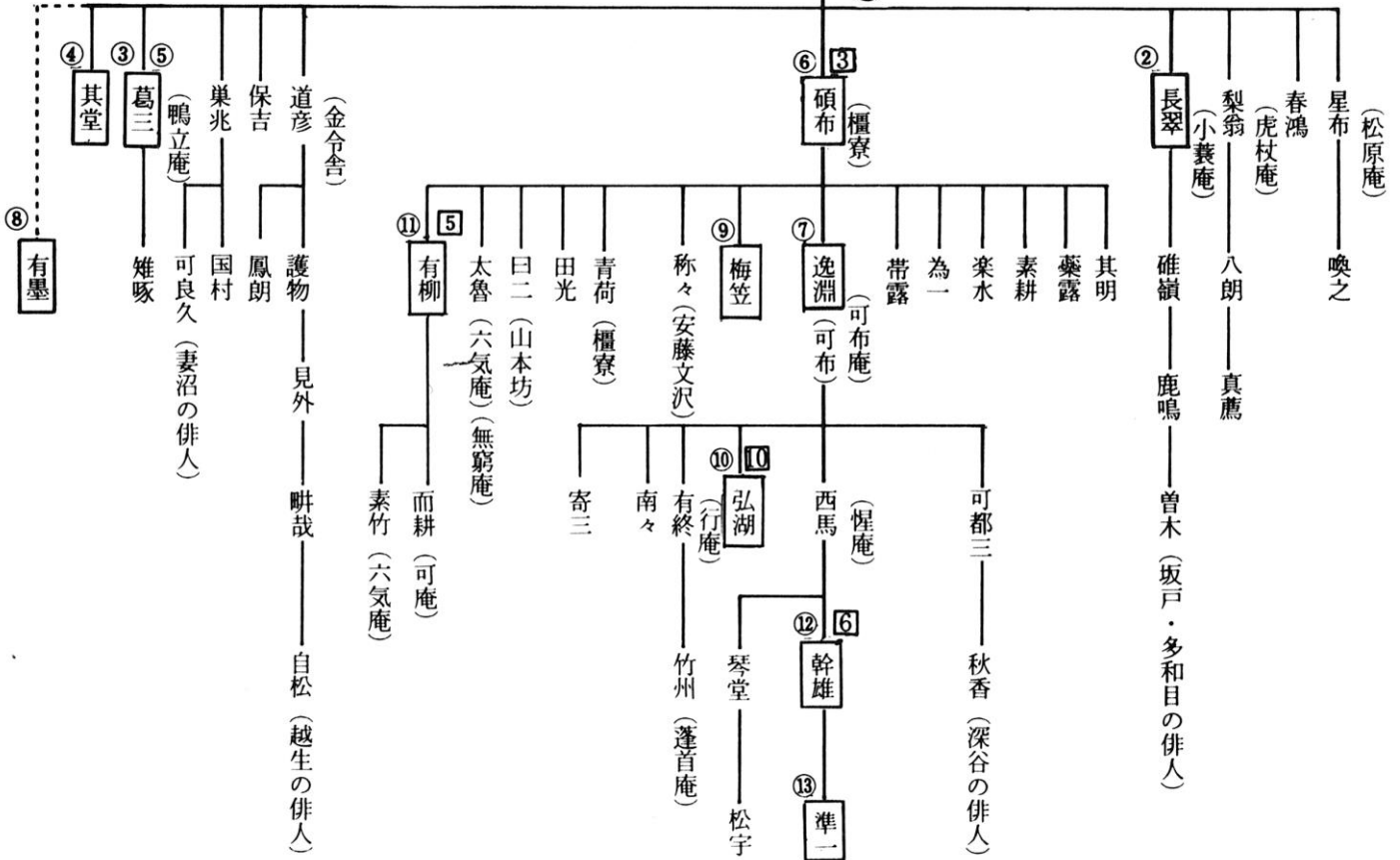
春秋庵俳諧略系譜

□ は、春秋庵を称した人々

①⑭ は、その継承順

③⑤⑥⑩ は、自称の世数

正風
芭蕉 — 涼菟 (伊勢派) — 乙由 — 柳居 — 鳥酔 — ① 白雄 (春秋庵)



注
○ 碩布は、白雄—葛三—碩布を正統とし、自ら三世と称した。
○ 有柳は、白雄—葛三—碩布—梅笠—有柳を正統とし、五世を称した。幹雄は、有柳の考えを踏襲し六世を称する。
○ 弘湖は、葛三の再庵を入れると十世となる。

内野勝裕『檀寮碩布と春秋庵をめぐる人々』（まつやま書房、1986年）より一部改編して転載